

真実の伝え方問い掛ける

29日付朝刊から、湊かなえさんの小説「ロードキヤスト」が始まる。読んで嫌な気分になるミステリー「イヤミス」を多く手掛けてきた湊さんだが、今回は青春「ミステリー」で新境地を開く。主人公は放送部の高校生。コンクールの全国大会を目指しラジオドラマを制作する中で、ドキュメンタリーとは、放送とは何かを突き詰めていく。物語の構想や狙いを湊さんに聞いた。(藤森恵一郎)

朝刊新小説、29日スタート

ロードキヤスト



連載への抱負を語る湊かなえさん＝東京都港区

みなと・かなえ 1973年広島県生まれ。武庫川女子大卒。「告白」で本屋大賞、「ユートピア」で山本周五郎賞。洲本市在住。

湊かなえさんに聞く

―本作は明るく、さわやかな印象。
「作品を書く時、載る媒体を意識します。新聞小説は大体は朝に読まれると思います。じゃあ、どんな話を書きますか。もう少し気持ちの良いものを書けたらいいな。だけど、ただの明るく楽しい話ではなく、今の社会のこつこつ、何か問題提起ができた、今の10代の子の姿を書いたりできたらいいなと思いました。あまり新聞を読まな

高校の放送部舞台「青春ミステリー」で新境地

―新聞小説の執筆は初めて。
「今までは、章ごとに視点人物が変わって、同じ出来事も見え方が違う作品が多かったです。でも新聞小説は細切れなので、読者が継続して寄り添い、応援できるような主人公の視点の長編にしたいと思っています。あと、上手に(物語に)波を作って『あしたの続きが読みたいな』と思ってもらえるようにしたいです」

―報道のあり方に問題意識を持つている。
「事件や問題を起した人物について、やったことの大きさよりも、報道の大きさと善悪が判断されがちになっているんじゃないかなと感じます。だから作品の中では、個人的な感情や立ち位置、糾弾する人の声の大きさによって判断するのではなく、みんな意見を出し合っただキュメンタリーのあり方を考えたいかな話にしたいなと思います」

―なせ放送部を。
「運動部や吹奏楽部に比べて、放送部が全国大会を目指して頑張っていることあまり知られていないんじゃないかと思いました。でも、私が住む兵庫県

の淡路島では高校の放送部の活動が盛んで、よく新聞にも全国大会出場とか載っているんです。この子たちがドキュメンタリーを作るとしたら、どんなことに注目するのかを考えてました」

―全国紙ではなく、地方紙での連載。
「高校生が地方から何かを発信する話を書くために、すごくいい舞台を与えていただけだと思います。よく、地方に住む作家はその地方を舞台にした作品を書いて、その地方に発信すればいいと誤解を受けます。でも地方から全国に向けて発信し受け入れられると、それはそのまま世界にも通じると思っています。普遍的に物事を見て想像し考えたいのは(東京在住の作家よりも)実は地方に住む者の強みだと思っんです」

× 朝刊に連載中の横尾忠則さんによる自伝「この道」は28日で終了。続いて湊さんの小説「ロードキヤスト」が始まります。